



Title	エチオピア母子保健事情 : アルマ・アタ宣言から10年
Author(s)	
Citation	大阪公衆衛生. 1988, 54, p. 11-11
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83707
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

エチオピア母子保健事情

— アルマ・アタ宣言から10年 —

WHOとユニセフが共同で、有名な『アルマ・アタ宣言』を発表したのは1978年のことである。そのとき“Health for All by the Year 2000”(2000年までに全人類に健康を)が目標として採択され、方法として『プライマリ・ケアの推進』が唱えられた。

『宣言』から10年たった現在、その成果はどうなっているか？ その一端をうかがわせるものとして、最近の“ニューイングランド医学雑誌”に次のようなエチオピアからの報告が出ている。(1988年10月6日号, p.918)

エチオピアはアフリカ大陸東北部に位置し、世界の最貧国の1つで、人口は4,500万人。1973～1984の人口の年間増加は2.9%で、25年間で2倍になるという高率だ。計画出産をしているものは2%しかない。人工妊娠中絶は違法となっており、もぐりの中絶による敗血症や腎疾患はきわめて多い。

国連の推計(1980～1984)によれば、児童の60%が軽中度の、10%が重度の栄養不良であるという。児童の死亡の45%は下痢性疾患によるものと見られる。

1985年の1歳児の予防接種の実施率は、DPTが6%、ハシカ12%、ポリオが6%、結核が11%、と、きわめて低い。

1974年の革命で社会主義国となったエチオピアは、『アルマ・アタ宣言』を国家計画に取り入れ、さらに1985年には保健10年計画を発表した。その目標として、

- ① 平均寿命を42歳から55歳に伸ばす
- ② 乳児死亡率(出生1000対)を145から95に下げる
- ③ 国民1人あたりの年間受診率を5倍(0.5回→2.5回)に増やす

などを掲げ、また妊婦と乳幼児すべてに予防接種を行き渡らせたいとしている。

しかし、人口規模と増加率の大きさ、経済事情等からみて、これらの目標は達成不可能と思われる。ヘルス・マンパワーの不足も極端で、1984年では医師729人、看護婦1960人しかいなかった。政府が医師等の養成をはかっても、出来上がった医師は好条件を求めて国外へ流出するという。